

# 一人称の語り手によって語られる文学作品世界の重層性

—— 小川洋子『刺繍する少女』における語り手「僕」が編み出す作品世界の臨場性・省察性・他者性 ——

Multiple World of Literature Told by a First-person Narrator :  
Reality, Reflexivity and Otherness in Yoko Ogawa's the Embroidering Girl

丸山 範高

MARUYAMA Noritaka

(和歌山大学教育学部)

2021年9月30日受理

## 要旨

本研究の目的は、一人称の語り手が語る文学作品世界の臨場性・省察性・他者性を読者が俯瞰的・構造的・重層的に読み解くことの意義を明らかにすることにある。一人称の語り手「僕」が語る『刺繍する少女』は、当事者として出来事当時の感情が語られる世界、その出来事を語る現在において省察した世界、そして、語り手が語り得ていないながらも、ことばの仕組みから立ち上がる語り手の語りを超える世界、の三層によって作品世界が構成されている。そして、その作品世界の重層性を読み合わせると、「僕」と「彼女」と「母」と、登場人物それぞれの思いが交わることなく相互疎外状況にある世界が浮かび上がってくる。『刺繍する少女』は、一人称の語り手の恋愛経験を追想する作品ではなく、その恋愛経験から、登場人物同士の思いがすれ違っていく世界を描き出した作品と読めてくる。こうした文学作品の読みの研究は、読みの多様性ではなく、読みの拡張性を拓く研究として位置づけられる。

### 1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、一人称の語り手が語る文学作品における三層世界を読者が俯瞰的・構造的・重層的に読み解くことの意義を考察することにある。小川洋子『刺繍する少女』を取り上げ、一人称の語り手「僕」によって語られる過去の出来事が描かれた世界と、語る現在においてその出来事を意味づけた世界、さらには、語り手が意味づけ得ていない世界（「語り手を超えるもの」（田中実2001 pp.61-62.））の三層世界を構造的に読み解くことで、一人称の語り手によって語られる文学作品世界の広がりや考察するものである。

研究の方法として、先行研究のレビューと、作品の語り語られることばの仕組みの分析・総合を行う。文学作品の一人称語りに関する研究と小川洋子作品研究と、それぞれの先行研究をレビューし残された課題を特定した上で、『刺繍する少女』における作品のことばの関係性を読み解くのである。はじめに、一人称語りの文学作品に関わる先行研究において十分踏み込めていない解釈領域があることを課題として示す。また、その解釈領域は、小川洋子作品に関わる先行研究でも踏み込めていないことを示す。続いて、『刺繍する少女』における語り語られる作品のことばの仕組みを読み解き、一人称の語り手が語る作品世界を俯瞰し、構造化する。そして、その作品世界が語り手にとっての臨場性・省察性・他者性それぞれを抱え込んだ三層構造にあることを明らかにする。さらに、作品世界に内在す

る三層世界を相互参照することが一人称語りの文学作品研究にもたらす意味を考察する。

なお、作品本文の引用は、小川洋子(1999)『刺繍する少女』角川文庫による。

### 2. 先行研究の検討

一人称語りの文学作品研究では、その作品世界が持つ内容的意義や、その語りの機能の多様性などに関する研究が進められてきた。しかしながら、語りのことばを分析的に捉えることで立ち上がる、語り手の語りの外側に広がる作品世界を切り出し、その世界を語り手が語る内側世界と対照させる研究は十分なされていない。先行研究では、一人称の語り手が捉え得ていない了解不能な他者性の世界と、語り手が語る過去の出来事と、その出来事の現時点からの意味づけとを重ね合わせた三層の作品世界についての考察は十分なされていないのである。

一人称語りによる作品世界の内容については、中島国彦(1978)が、その意義と限界を考察する。『坊ちゃん』が「今でも生き生きとした生命を保持しているのは、(中略)一人称の形式こそ、それを根元から支えるものとなっている」(p.11.)と『坊ちゃん』が一人称の語り手によって語られることを肯定的に評価する。しかし、その一方で、「坊ちゃんの視線が自分の内部に向けられることはほとんどなく、坊ちゃんは自分も『宛にならない』人間の一人であることに気づいていない。(中略)

一人称の形式というあり方に飼いならされてしまっている] (p.15.)と、一人称の語りが内包する陥穽をも指摘する。一人称の語りは、その独特な語りから語り手の個性的な人物像、さらには、その語りによって構築される作品世界の固有性が浮き彫りとなる反面、その語りはあくまで語り手の限られた視野に拠る世界であるため、そこには内向きの偏向性が顕在化しやすくなる。また、三谷邦明(1998)は、「真実」が表現される点に一人称語りの意義を見出す。一人称の語りは「自己体験を表出する言説」(p.41.)であるため、事実か虚構かの判別を超えたところに立ち上がる「真実を内包できる」(p.45.)という。芥川龍之介『藪の中』では、登場人物それぞれの一人称の語りの「齟齬している事実を統率する視点はない」(p.46.)ことから、「各私語りの多義的で重層した構造が明確化されてくる。一人称/過去の言説を、最高に利用した小説が、ここに誕生したのである。」(p.46.)と肯定的に評価する。『藪の中』では、登場人物それぞれの一人称の語り展開し、互いにかみ合うことがないながらも、多義的・重層的な「真実」が開陳され、こうした点に一人称語りの作品の文学的意義を見出す。さらに、廣野由美子(2011)は、日常生活における見慣れた感覚を「異化」する機能が一人称小説は三人称小説よりも高いという。「三人称形式は客観性を帯びた方法」(p.9.)であるのに対し、「一人称形式の特性は、ひとりの限られた視点から眺めることによって生じる主観性にある。たいてい、その見方には何らかの片寄りがあり、言葉遣いや声の調子にも、性格の特徴や癖が表れ」(p.8.)るからである。一人称の文学作品は、限られた、偏った視点から語られるがゆえに、読者にとって「ふだん見慣れたものを『見慣れないもの』として表現することによって、認識に揺さぶりをかけ」(p.3.)る「異化」機能が発揮されやすい。小説が「私たちの認識に揺さぶりをかけ、経験を拡大する可能性を秘めた芸術形式である」(p.251.)ことを鑑みると、一人称の文学作品は高く評価できるといえる。

これら、作品世界の内容に関わる先行研究は、いずれも、一人称の語り手の語る内側世界の内容とその意義の究明を目指しており、語り手の語る世界を俯瞰化・相対化したところに見出される語り手を超える語りの外側世界と語りの内側世界とを読み重ねることに踏み込めていない。

一方、一人称の語りの機能については、安藤宏(2008)が、近代の一人称小説の歴史的な流れを概観している。一人称語りを持つ機能を「書き手の『自己』に安易に重ね」るのではなく、「自ら虚構であることを読み手に騙るための手だて」(p.44.)とする。そして、「当事者的なりアリズムから『描く自己』の再発見へ。そこからさらに『対話モード』の働きによる自己言及の運動へ。こうした一連の流れは近代の一人称小説がたどる

べきある種必然的な道程であった」(p.43.)と結論づける。この研究は、語り手が語る経験世界を語り手自身が対象化すること、そして、その世界を語り手自身が省察することまでは言及するが、語り手が語り得ていない語りの外側の世界を作品のことばの仕組みからあぶり出し、その世界を読むことの意義に踏み込んだ考察はなされていない。

ところで、文学作品における語り手を超えて広がる世界については、田中実が「語り手を超えるもの」(田中実2001 pp.61-62.)「機能としての語り手」(田中実2008 p.16.)という概念を立ち上げ、作品のことばの仕組みを分析することで、種々の作品研究を行っている。田中実は直近の論文で、「作品全体を構造化しているのは(中略)〈語り手を超えるもの〉、すなわち、物語全体を仕組み、仕掛けていく〈機能としての語り手〉です。これに注目していくと、しばしば〈作品の意志〉が見えてきます。」(田中実2021 p.30.)と述べる。一人称の語り手の語りの内側世界を超えて広がる外側世界は、文学作品のことばの仕組みから必然的に表象される世界であるとともに、そこに読者が向き合うべき作品の意志があるという。ただし、一人称語りの内側世界と外側世界を相互参照することが、一人称語りの文学作品研究にどんな意義をもたらすかについては、さらに多くの具体的な作品の分析を通じた考察が求められる。

小川洋子の文学作品については、教科書教材として採用されることも多い<sup>(4)</sup>ため、様々な論が展開されている。たとえば、読みの拠りどころとして読者が導入する背景知識としての「フレーム」を用いて読解し、作品世界がもたらす意味の多様性を開示した先行研究がある(西田谷洋2020 pp.1-20.)。それは「物語世界は消費者それぞれに異なる既存のフレームによって理解され」(p.6.)、「読解において複数性・多様性の成立は不可避である」(p.4.)という文学作品の読解観に則った読みである。また、木村功(2021)は、語り手「わたし」の語りを分析しつつ、小川洋子の文学観と照合しながら、『『バックストローク』の世界で見出される『真実』』(p.3.)として作品に描かれた世界像を解明している。『『バックストローク』とは、弟を社会の『隅』へ追いやった家族の一員である「わたし」自身を一〇年後の『わたし』が再確認し、断罪する物語であった」(p.14.)と結論づける。このように、小川洋子作品に関わる研究は進んではいるものの、作品のことばの機能を語り語られる関係から分析的に捉え、語り手によって語られる内側世界と語りを超える外側世界とを読み重ねる研究は十分でない。

以上の先行研究をふまえ、本研究では、小川洋子作品の1つ『刺繍する少女』から、一人称の語り手によって語られる過去の出来事の領域、その過去の領域を語る現在において語り手自身が相対化し意味づける領

域、さらには、語り手の語り得ていない語りの外側の領域をそれぞれ切り出し、それら三層を重ねて読み合わせることで開かれる文学作品世界の意義を考察する。本研究は、読者が所有する作品外部の背景知識を導入して作品を読む試みでも、一人称の語り手が語る語りの内側世界だけを読む試みでもない。作品世界が、一人称の語り手によっていかに語られ、その語りの外側にどんな世界が広がり、作品世界がどのように重層化されているのかを、作品のことばとことばの関係性に着目して読解しようという試みである。

### 3. 小川洋子『刺繍する少女』における一人称語りをもたらし作品世界の特徴

『刺繍する少女』は、一人称の語り手「僕」が、乳癌を患い余命限られた「母」に付き添って訪れたホスピスで、十二歳の頃に心奪われた魅力的な異性と二十年超の年月を経て再会した経験を、回想形式で語った作品である。『刺繍する少女』は、①過去と現在という複数の時間により重層的な作品世界が構成され、②その世界は一人称の語り手によって主観的に意味づけられている。そして、③一人称の語り手の主観によって意味づけられるがゆえに、その作品世界ならではの個性や偏向性が見出され、その語りを相対化することで語り手を超える世界が開かれる。これら3つの特徴の具体的内容は、次の通りである。

一人称の語り手が回想形式で語る文学作品は重層的な作品世界を構成する。「回想形式では、語り手が語っている現時点と、語られている過去の時点との間に時間差があるため、二重の時間体系が含まれるという特徴がある。」からである(廣野由美子2011 p.15.)。『刺繍する少女』では、二つの過去と語る現在という三つの時間が流れている。語り手「僕」の十二歳の頃の出来事と、「僕」がホスピスで「母」や刺繍する「彼女」と過ごした出来事という二つの過去を、語る現在の時間が包み込む重層関係である。

また、一人称語りの文学作品を読み解こうとする試みは、作品世界に描かれた出来事そのものを解明することではない。語り手が作品世界の出来事をいかに意味づけているかを読み解く試みである。「語りとはつねに何かについての語りである」(菅原克也2017 p.190.)ことから、「一人称による回想の語りは、経験する私と語る私の時間的先後関係に取って代わりかかろうとすることがある。出来事や経験を語る行為のうちに、時間の経過がもたらす知識を織り込もうとする。(中略)回想の語りか時に美しく、時に暗い色どりを帯びるのもそのためである。」(p.192.)というように、一人称の語り手によって語られる作品世界は、語り手の主観的な意味づけの反映された情調を帯びたものとなる。『刺繍する少女』では、語り手「僕」が「母」を亡くす出来事が語られるものの、ホスピスや自然などの情景描写

に重苦しさが見られない。それは、出来事そのものが語られるのではなく、出来事について語り手によって意味づけられた世界が語られているからである。

さらに、一人称の語り手が語る作品世界は、その語り手の限られた視野から主観的に意味づけられた世界であるがゆえに、個性的で偏ったものとなる。『刺繍する少女』において語り手「僕」は、「母」や刺繍する「彼女」の他者性を顧みることではなく、刺繍する「彼女」に対する「僕」自身の思いの揺れを語るばかりである。しかしながら、そうした「僕」の語りを相対化することで、一人称の語り手「僕」が意味づけ得ていない「母」や刺繍する「彼女」の他者性といった語り手を超える世界が開かれる。

### 4. 小川洋子『刺繍する少女』における作品世界の二重性

『刺繍する少女』のことばの仕組みからは、一人称の語り手「僕」が意味づけ語る語りの内側世界と、「僕」が捉えきれない語り手の語りの外側に広がる語り手を超える世界とが表象される。2つの世界について、それぞれ分けて読み解くこととする。

なお、以下の作品本文の引用は角川文庫により、引用箇所は(角川p.○.)と記す。

#### 4-1. 語り手が語る、語りの内側世界

語り手「僕」が語る作品世界は、2つの過去の出来事を、語る現在の時点から回想し意味づけたものによって構成されている。「僕」の語りは、①刺繍する「彼女」と対照しつつ副次的に語られる「母」の描写、②十二歳の頃と二十年超を経て再会した時とで変わらない「彼女」の描写、③「僕」の「彼女」への感情の二重性、の3点から構造化できる。

##### 4-1-1. 「彼女」と対照しつつ副次的に語られる「母」の描写

「母」については、刺繍する「彼女」と対照されながら副次的に語られる。それは、「母」の死に臨んだ際、「母」のことより「僕」には彼女の姿をもう一度確かめることの方が大事に思われた。」(角川p.29.)という語りによって象徴されている。「母」は、「彼女」との出来事を引き出すきっかけ、あるいは、「彼女」との出来事に付随して語られるに過ぎない。たとえば、「彼女」との再会は「母」のホスピス入院がきっかけであるが、より多く具体的に語られるのは「母」ではなく「彼女」に関する出来事である。また、「僕」の十二歳の頃の別荘での出来事を語る場面で、「サイダーとカステラを持ってきた」(角川p.17.)「母」が登場するが、それは「僕」と「彼女」がともに過ごす中心場面の中で脇役的に登場するに過ぎない。

そして、「母」そのものに関する語りは次のように、身体の様子や食事の量など外形的・抽象的なもので占められている。

## 【「僕」が十二歳の頃の「母」】

- ・母はまだ若い。きれいに化粧をし、派手なアクセサリをあちこちにつけている。ブラウスの上からでも、盛り上がった乳房の形が分る。今の母がなくなしてしまったものが、そこには全部そろっている。(角川p.17.)
- ・母は上機嫌で始終にこにこしていた。「うちにもあなたみたいな娘さんがいれば、さぞかし楽しいでしょうね」と、何度も同じことを言った。(角川p.21.)

## 【ホスピスでの「母」】

- ・母はゼリーの入ったガラスの器を持ち上げた。青白く細い手首を見ていると、その器がひどく重いものに思えた。(角川p.8.)
- ・痛み止めの注射をしてもらっている時以外は、入院していることさえ忘れそうだった。(角川p.9.)
- ・付き添いと言っても、僕の方はたいして仕事はなかった。(中略)時折、具合が悪くなりそうな予感がすると、背中や腰をさすってやったが、母は時計を見ているわけでもないのに、いつもきっかり八分で、「もう充分だよ」と僕の手を押し戻した。(角川p.9.)
- ・母が咳をする。小さく萎れた身体の内側に、沈殿してゆくような咳だ。(角川p.17.)
- ・だんだんと母は弱っていった。口にできる食べ物の量が減り、散歩する時間が短くなり、喋る速度がゆっくりになった。反対に、痛み止めの量は増えていった。もう、デザートを交換することもなくなった。母は僕に二人分食べるよう勧めた。そのたび、「たくさん食べなきゃ大きくなれないよ」という母の昔の口癖を思い出した。(角川p.20.)
- ・もう母は車椅子に乗ることもできなかったので、ベッドに寝たままサンデッキで日光浴をした。(角川p.26.)
- ・毛布に包まれた母の身体に、たっぷりと光が射していた。それは呆気ないほどに小さな塊だった。(角川p.26.)
- ・木曜の午後、母は死んだ。すばらしく天気の良い日だった。(角川p.29.)

これらの「母」に関する描写は、「彼女」に関する具体的描写と対照させると、次のような、ホスピスに入院する一般患者に関する外形的・抽象的な描写と同類に位置づいてくる。

- ・サンデッキには数人の患者の姿が見えた。みんなぼんやりと遠くを見つめていた。(角川p.11.)
- ・日差しは明るかったが、どこかに秋の気配がした。(中略)いつのまにか、まどろんでいた患者はみな姿を消していた。(角川p.14.)

『刺繍する少女』において、語り手「僕」によって外形的・抽象的に語られる「母」は、具体性に富んだ「彼女」の描写と対照すると、相対的に「彼女」の存

在を際立たせる効果を發揮しているとも言える。

## 4-1-2. 十二歳の頃と二十年超を経て再会した時と変わらない「彼女」の描写

「彼女」の描写は、「母」とは対照的に、微細に語られる。そして、その語り方は、その容姿・表情・手の動きなど身体的描写が中心となっている点と、二十年を経ても昔と変わらない姿として描かれている点に特徴が見出される。

二十年を経ても変わらない「彼女」については、次のように、語られる。

- ・身体の中が透けそうなほどに白い肌、長いまつ毛のせいでいつもまぶしそうに見える目の表情、ほっそりした首、たっぷりとした髪の毛。十二歳の僕が受けた印象が、全部そのまま残っていた。(角川p.13.)
- ・いつしか少女が昼間の彼女にすり替っていた。一緒に中庭から海を眺めている時、恥ずかしそうにワンピースの裾を直していた彼女だ。一度まばたきする間に、また十二歳の少女に戻る。(角川pp.19-20.)
- ・彼女も変わっていなかった。確かに姿は大人なのに、ある瞬間ふと、記憶の中の少女と入れ替った。そのことが不自然でなく、むしろ心地よかった。(角川p.28.)

このように、「彼女」は二十年を過ぎても十二歳の頃と変わらないと繰り返して語られるが、その変わらなさは「彼女」の容姿によって判断されている。「彼女」の性格の特徴や思想などによって判断されているわけではない。このことは、「彼女」の金色に光り輝く髪の毛の描写からもうかがえる。十二歳の「彼女」の髪について「そんなことは僕だってとっくに気づいていた。光の加減で彼女の髪が、淡い色に変って見えるのを。その瞬間が侵しがたいほどきれいだったから、言葉にするのが怖かったのだ。」(角川p.22.)と語るが、二十年を経た場面でもくわずかに翳った日差しが横顔を照らしていた。髪の毛がさっと金色に光った。僕はそこに触れてみたくて仕方なかった。」(角川p.25.)と、同様な描写が見られるのである。

その他の「彼女」に関する描写も、次の通り、容姿や表情など身体的特徴に関わるものとなっている。「彼女」の人生観や思想・信条などに踏み込んで語られることはない。

- ・彼女は実際に口を大きく開けてみせた。赤みがかかった喉の奥の粘膜まで見えそうで、僕はあわててうつむいたのだ。(角川p.13.)
- ・彼女は涼しげなチェックのワンピースを着ていた。袖なしで裾が丸く広がっていた。右のポケットが少しふくらんで見えた。喘息用の噴霧器が入っているのだ。肩の上で髪の毛がカールしていた。無造作に投げ出した足は白くとても細いけれど、どことなく柔らかみがあった。(角川p.17.)
- ・布の上で彼女の指は優しい生き物のように動いた。

(角川p.18.)

・無邪気に微笑んではいたけれど、いつものように目元はまぶしげで、何かの拍子に哀しみの表情に変わってしまうのではないかという、危うさを含んでいた。

(角川p.19.)

このように「彼女」についての語りは、十二歳の頃の姿と二十年後の姿とを、身体的特徴という観点に絞って、類比的に語るという特徴が見出される。

#### 4-1-3. 「僕」の「彼女」への感情の二重性

語り手の「僕」は、十二歳の頃の別荘と二十年後のホスピスと、それぞれの場所での「彼女」との交流について、出来事を経験した当時の感情を語りつつも、その感情を語る現在において相対化している。そこには、「僕」の感情の二重性が垣間見られ、自らの経験を省察する語り手の存在を読み取ることができる。

語り手「僕」の感情は、「母」ではなく、刺繍する「彼女」に関わるものを中心に構成されている。そこで、「僕」の「彼女」への感情について、出来事当時の過去の感情と、語る現在の感情とに分けて読み解くこととする。

十二歳の頃に「彼女」と出会い、二十年後のホスピスで「彼女」と再会した「僕」は、「彼女」を特別な異性として認識し続ける。そのうち、十二歳の経験については、次のように語る。

・僕がうなずいたのは、もちろん刺繍に興味があったからなどではなく、彼女の手元に少しでも近づきたかったからだ。(角川p.18.)

・僕は(刺繍の…筆者補足)女の子の髪飾りなど見てはいなかった。彼女だけを見ていた。(角川p.19.)

「彼女」との身体的・精神的距離を少しでも縮めたいという切迫感が、これらの表現からうかがえる。また、こうした当時の「僕」の感情は、「弟」のふるまいと対照させて語られることで、より際立つ。

・「お姉さんの髪、金色に光ってるね」唐突に弟が言った。(中略)僕は弟をにらみつけたい気持にかられた。妙にイライラした。そんなことは僕だってとっくに気づいていた。光の加減で彼女の髪が、淡い色になって見えるのを。その瞬間が侵しがたいほどきれいだっただから、言葉にするのが怖かったのだ。なのに弟はあっさりとしてそれを口にし、今は指についた(ローストチキンの…筆者補足)脂をなめている。(角川p.22.)

「弟」は「彼女」を特別な異性として意識していないため、取り繕うことなく言葉を発する。ところが、「僕」は、「彼女」の魅力に取りつかれているがゆえに、「彼女」への向き合い方にぎこちなさが生じているのである。

また、ホスピスで再会した折の経験については、次のように語る。

・「君と一緒にいると、ここが死に塗り込められた場所

だっていうことを、忘れてしまいそうだ」頭ではあの夏わき起こった死の数々を思い出しながら、口ではそれと正反対のことを言っていた。でもただ僕は正直な気持ちを言葉にただけだった。(角川p.24.)

・(彼女の…筆者補足)髪の毛がさっと金色に光った。僕はそこに触れてみたくて仕方なかった。(角川p.25.)

・できればいつまでもこうして、刺繍する少女を見つめていたかった。他のなにもにも邪魔されることのない、二人だけの記憶の風景に閉じこもっていたかった。(角川p.28.)

・彼女を探して病院中をさ迷っただけだった。(角川p.29.)

・もっと他に必要な仕事があるのは分っていた。(中略)けれど僕には彼女の姿をもう一度確かめることの方が大事に思われた。(角川p.29.)

「彼女」との身体的・精神的距離を少しでも縮めたいという切迫感は、十二歳の頃と同様である。加えて「君と一緒にいると、ここが死に塗り込められた場所だっていうことを、忘れてしまいそうだ」からは、終末期医療を施すホスピスが本来持っている死の重苦しさを打ち消すものとして「彼女」の存在が「僕」の意識に迫ってきていたことがうかがえる。

このように、過去のある時点での、「僕」にとっての「彼女」は、自分の意識のすべてを占有するほど影響力の大きい存在として意味づけられている。それは、「彼女」を求める「僕」自身のふるまいや感情を語ったり、「弟」と「僕」との「彼女」に対する言動の違いを対比させたり、死に向き合わざるを得ない「ホスピス」という特殊な環境下でありながら「ホスピス」の重苦しい雰囲気を持象して語ったりするという、語り方の工夫によって示されている。

ところが、語る現在における語り手「僕」の「彼女」に対する感情については、過去の出来事当時と異なるものを読み取ることができる。「彼女」の異性としての魅力ではなく、「彼女」の社会的に逸脱した行動が際立つような語り構成されているからである。たとえば、作品冒頭における、ホスピスの「看護婦」とのやりとりが注目される。ここでの語りは、「彼女」の行動の社会的逸脱性を伝えるための伏線として読める。作品冒頭は、<中庭に猫が住みついていますけど、食べ物はやらないようにして下さい><太りすぎて糖尿になったものだから、食餌制限中なんです>(角川p.6.)という「看護婦」の発言の引用から始まる。ホスピス中庭の猫の餌付けをしてはいけないという決まりは、「母」の生死に直接関係する内容ではなく、しかも、入院生活に関して「あれこれ丁寧に説明してくれたあと、看護婦さんは付け足して言った」(角川p.6.)に過ぎないことである。にもかかわらず、<僕はメモの最後に猫と

書いて丸で囲んだ>(角川p.6.)ことまで語る。こうした、蛇足とも読み取れることを、わざわざ冒頭に配置し語り始めるところには、語り手のこだわりがうかがえる。この猫は、後半の場面で次のように登場する。

- ・木立の間から猫が歩いてきた。初めから狙いをつけていたかのように、ぴったり僕たちの足元で立ち止まり、腹ばいになった。太りすぎの糖尿の猫だ。(角川p.22.)
- ・彼女はワンピースのポケットから、ビニール袋に入ったビスケットを取り出し、一枚猫の鼻先に置いた。猫は申し訳ないような情けないような声で一度鳴いてから、身体を起こし、前脚で挟んでビスケットを食べた。(角川p.23.)
- ・「このビスケットが大好物なのよね」独り言のように彼女が言った。僕は、食餌制限中なんだよ、という言葉飲み込んだ。(角川p.23.)

当時の「僕」は、「彼女」に傾倒するがゆえに、<食餌制限中なんだよ、という言葉飲み込んだ>というように、「彼女」との関係を気まずいものにしかねない行動が取れず、ホスピスのルールを逸脱する「彼女」に何も言えない状態であった。

しかしながら、これら、猫の餌付け禁止の決まりとそれを破る「彼女」の行動、そして「彼女」に注意できなかった過去の自分について、語る現在において、省略することができたにもかかわらず、語る。さらに、猫の餌付け禁止の決まりは、<僕はメモの最後に猫と書いて丸で囲んだ>ほどの念の入れようだったことまでも付け加えている。

また、社会的に逸脱した「彼女」の行動については、夏休みの宿題に関するやり取りの場面でも、その片鱗がうかがえる。<君はもう、宿題全部すんだ？>(角川p.16.)という「僕」の問いかけに対し、「彼女」は<読書感想文と、自由研究と、あとはドリルが半分くらい残っているかな>(角川p.16.)<でもいいの。発作のせいでできませんでしたって言えば、たいていは許してもらえらるから>(角川p.17.)と発言する。喘息に苦しんでいたにせよ、精一杯できるところまで取り組むと言うのではなく<発作のせいでできませんでしたって言えば、たいていは許してもらえらる>と言うところからは、努力せず課題を放棄する「彼女」の姿が表象される。

こうした「彼女」の社会的に逸脱したと受け止められる言動は、省くこともできたはずである。もし、「彼女」の魅力を全面的に称賛するということであれば、むしろ省略した方が、読者には伝わりやすい。にもかかわらず、語り手の「僕」は取り上げる。そこには、「彼女」のふるまいに対する疑念とともに、「彼女」に心を奪われていた当時の「僕」自身を相対化し批評するまなざしを読み取ることができる。

『刺繍する少女』の語りには、出来事当時の2つの

過去と語る現在という3つの時間軸が組み込まれ、それによって、作品世界に語り手の自己省察性が刻み込まれている。「彼女」に心を奪われ偏ったとらえ方しかできなかった出来事の経験当時の自分と、語る現時点で、過去の自分の経験を相対化する自分とが重ねて語られているからである。

#### 4-2. 語り手を超える作品世界

『刺繍する少女』は、語り手「僕」が意味づけ語る世界のみならず、語り手を超えて広がる世界につながることばの仕組みを持っている。語り手「僕」が意味づけ得ていない、語り手を超える世界は、①「僕」が「彼女」と再会・決別するそれぞれの場面において語られる超現実的描写と、②「僕」と「母」、あるいは、「僕」と「彼女」とで交わされる会話のずれとによって、その存在が示される。

「僕」が「彼女」と再会・決別するそれぞれの場面において、次のような超現実的な情景描写がなされている。

- ・音楽室の隣、細い通路のつきあたりにも部屋があった。“ボランティア室”と書いてあった。(中略)しばらく僕はその風景の前でたたずんだ。息を深く吸い込めないような、唇がひんやりするような妙な感触が一瞬だけ走った。もしかしたら気のせいかもしれない。(角川p.10.)
- ・ボランティア室はすっかり片付けられ、糸屑一本さえ落ちていなかった。まるで記憶の小人が、彼女の残像を丁寧に拭き去ってしまったかのようなようだった。(角川p.30.)

これらの描写は、現実と超現実とをつなぐ境界のような意味合いを示しつつ、この境界を超えて「僕」は「彼女」と再会・決別する。しかしながら、語り手の「僕」は、この情景の不思議さの意味を了解し語り尽くしていないことから、「僕」が語る「彼女」は、あくまで「僕」が「僕」の思い込みで捉えた「僕」の中の「彼女」に過ぎないのであり、「彼女」本来の他者性は、語り手を超える向こう側の世界に広がっていることとなる。

また、「僕」と「母」、あるいは、「僕」と「彼女」とで交わされる会話には、互いの意識のずれが含まれているものの、「僕」はそれを意味づけ得ていない。自分が捉えきれない「母」や「彼女」の生きる世界を語ろうとする志向性は、「僕」から読み取れない。「母」も「彼女」もともに、重苦しい人生を背負って生きている。しかしながら、「僕」の語りは、「彼女」を自分にとって理想の異性像として造形し、その理想の「彼女」に心奪われた「僕」自身の経験を語るばかりであり、また、「母」については、「彼女」中心の作品世界において周縁に追いやられてしまっている。そこでは、「母」や「彼女」それぞれの他者性は顧みられていない。

「母」の人生は、「僕」によって語られた情報から推察するに平坦なものではなかったはずである。〈あの年の冬、父親(=「僕」の父親、つまり「母」にとっての夫…筆者補足)が飛行機事故で死んだ。経済的な問題もあり、別荘は売ってしまった。〉(角川p.12.)〈父の酒量は増すばかりで、既にその冬起こる悲劇の兆しは酒臭い息に現われていた。〉(角川p.24.)という人生を「母」は余儀なくされている。そうした人生を歩んできた「母」は、家族との生活を含め、自分の人生について並々ならぬ思いを抱えつつ、ホスピスでの最期を迎えたことが推察される。しかし、「僕」によって語られる「母」の描写は、先述したとおり、外形的・抽象的な語りにとどまり、「母」の過酷な人生を反映したものとはなっておらず、「僕」は「母」の他者性を捉えきれていない。

「僕」と「母」の意識のずれは、ホスピスでの「彼女」をめぐる次のような会話に表れている。

「うちの西隣に別荘を建てた家族のこと、覚えてる？」  
(中略)

「さあ……」母は考え込みながら寝返りを打った。  
「隣っていえば、洋画家の先生のお宅じゃないの。あそこは親しくさせてもらったよ」

「いや、それは東隣だ。僕が言ってるのは西だよ。蟹のたくさんいた沢があって、その向こうの林の中。僕と同年の女の子がいたんだ。母さんも会ったことがあるはずだよ」

「ふうん……」さして興味のないふうに、母はあいまいな声をもらした。

「今日、その子に再会したんだ。このホスピスでね」  
「……」返事はなかった。代わりに寝息が聞こえた。  
(角川p.15.)

「母」は、「彼女」への関心が希薄であるが、「僕」は半ば強引に「彼女」の存在を「母」に思い出させようとする。しかし、「母」の「彼女」への関心は高まることなく、〈返事はなかった。代わりに寝息が聞こえた。〉と、会話を中断してしまう。「僕」と「母」とで「彼女」に対する関心の程度は隔たったまま、コミュニケーションが中断してしまう。そして、これ以外の「僕」と「母」との会話は、食事中の会話など、たわいなものしか取り上げられていない。

「僕」は「彼女」のことで心に余裕がなく、死にゆく「母」が抱えているであろう思いを語り得ていない。しかしながら、語り手の「僕」によって情報提供される母の境遇、あるいは、「僕」と「母」との会話から伺える「彼女」に対する関心の程度の違いから、「母」の他者性を垣間見ることができる。ここに、語り手「僕」の語りを超える領域が浮かび上がる。

一方、「彼女」の人生は、「僕」によって語られた情

報から推察するに重苦しく閉塞感に満ちたものであったと推察される。〈「喘息が治らなくて、いまだに就職もせず、結婚もせず、家に引きこもっているの。ここでのボランティアが唯一の社会参加なの」〉(角川p.12.)とあるように、持病を抱え、制限の多い過酷な生活を強いられている。しかしながら、「僕」の語りは、「彼女」の、そうした過酷な人生に寄り添ったものではなく、異性としての身体的魅力、自分自身の気持ちの高揚感に関わる内容に終始している。

「僕」と「彼女」の意識のずれは、「僕」と「彼女」との会話に表れている。二十年以上前の別荘で、「彼女」は、〈「一人ぼっちになりたい時、これをやるの。自分の指だけを見るの。小さな小さな針の先だけに自分を閉じ込めるの。そうしたら急に、自由になれた気分がするわ。」〉(角川p.18.)と言う。喘息に苦しむ「彼女」は、閉塞感から自分を解放するためのささやかな限られた手段として刺繍をするのだ、と切実な思いを口にすると、ところが、「僕」は、こうした「彼女」の切実な思いを受けとめきれておらず、その前後には〈「刺繍って、そんなにおもしろいかい?」〉(角川p.18.)と「彼女」の行動を軽視するかのような発言をしたり、〈「彼女の手元に少しでも近づきたかった」〉(角川p.18.)というように、「彼女」と過ごすことで高揚する自分の気持ちで精一杯であったりする。また、ホスピスでの会話でも、意識のずれが生じている。〈「君と一緒にいると、ここが死に塗り込められた場所だっていうことを、忘れてしまいそうだ」〉(角川p.24.)と、「僕」は彼女と過ごすことで得られる高揚感から生きている感覚を確かなものとする。しかしながら、彼女は〈「死に塗り込められてなんかいいわ。ここは通り道なのよ。あちらへ行く人と、こちらへ戻って来る人のね」〉(角川p.24.)と、死の重苦しさは否定するものの、ホスピスは生死の通過点に過ぎないという抽象的存在として捉える。それは、「僕」という存在とは関係のないところでの「彼女」なりの意味づけである。「僕」が「彼女」との関係性に拠った意味づけをするのに対し、「彼女」は「僕」の存在を捨象したところでの意味づけを行っており、意識のずれが際立つ。

以上のように、「母」も「彼女」も、ともに、厳しい人生を背負いながらも、その人生の意味は語り手の「僕」によって語られることはない。しかしながら、超現実的な情景描写や人物間の会話のずれなどから、語り手「僕」が意味づけ得ていない語り手を超える領域が『刺繍する少女』には広がっていることがわかる。

## 5. 考察

本研究では、小川洋子『刺繍する少女』における一人称の語り手「僕」が語る作品世界の臨場性・省察性・他者性という三層世界を読み解き、一人称の語り手による文学作品世界の広がりをもとに解明した。

一人称語りの文学作品研究では、語り手が語り意味づける語りの内側世界について様々な見解が示されてきた。たとえば、一人称語りの文学作品は、その個人的な語りによって作品の固有性が際立つとともに、一人の限られた語り手が語るがゆえに作品世界に偏りが生じるというものである。また、一人称語りによってリアリティが高まったり、語る自己を相対化して語ることで、作品世界において自己が二重化したりする、といった見解も先行研究で示されてきた(中島国彦1978・廣野由美子2011・安藤宏2008)。このように、語り手が意味づけ語る語りの内側世界に関する先行研究は多いが、語り手を超える世界に踏み込んだ研究は十分ではない。

また、〈語り手を超えるもの〉を読む研究を牽引する田中実の一連の研究は、語り手を超える世界(語り手にとって了解不能な世界)を読み解くことが中心で、語り手が語る内側世界と語り手を超える外側世界とを重層的に読み解く試みは十分なされていない(田中実2021など)。

さらに、小川洋子作品に関する研究では、語り語られることばの仕組みを読み解き、語り手によって語られる内側世界と語りを超えた外側世界とを読み重ねる研究は十分ではない(西田谷洋2020・木村功2021)。

このような先行研究をふまえ、本研究は、語り語られることばの仕組みを根拠としつつ『刺繍する少女』を読み解き、一人称の語り手が過去の経験を回想形式で語る語りの三層世界を俯瞰的に読み合わせることで表象される作品世界の重層性を解明した。

一人称の語り手「僕」は、刺繍する「彼女」に心奪われた十二歳の経験と、その「彼女」とホスピスで再会し交流した経験とを、経験当時の当事者としての感情を交えつつ、語る現在から省察的に回想形式で語る。その過程で、いわずに無批判に「彼女」に心引かれていた出来事経験当時の「僕」が、「彼女」の社会的に逸脱した行動を語りの中に組織することで省察的なまなざしを手に入れることとなる。その一方で、「僕」の語りには、超現実的とおぼしき情景描写や、「僕」と「彼女」、あるいは、「僕」と「母」との会話のずれが含まれており、語り手の「僕」が意味づけ得ない了解不能な世界が語りの外側に広がっている。語り手の「僕」は、死にゆく「母」や喘息を抱える「彼女」の他者性を語りきれておらず、「僕」の偏った観念で過去の経験が組織されていることがわかる。『刺繍する少女』は、過去の出来事の当事者として当時の感情が語られる世界、その出来事を語る現在において省察した世界、そして、語り手が語り得ていないながらも、ことばの仕組みから立ち上がる語り手の語りを超えた世界、の三

層によって作品世界が構成されている。そして、その作品世界の重層性を読み合わせると、「僕」と「彼女」と「母」と、登場人物それぞれの思いが交わることなく相互疎外状況にある世界が浮かび上がってくる。『刺繍する少女』は、一人称の語り手の恋愛経験を追想する作品ではなく、その恋愛経験から、当事者同士の思いがすれ違っていく世界を描き出した作品と読めてくる。

語り手によって語られた文学作品世界の重層性を読み解く試みは、読みの多様性ではなく、読みの拡張性を拓く研究として位置づけられる。

(注)2021年度使用高等学校国語教科書掲載の小説教材は次の通りであり、複数の教科書に多数の作品が収録されている。「トランジット」(東京書籍『精選現代文B』)、「飛行機で眠るのは難しい」(三省堂『精選現代文B』改訂版)、「バックストローク」(教育出版『精選現代文B』・『現代文B』、桐原書店『新探求現代文B』)、「ひよこトラック」(教育出版『精選国語総合現代文編』)、「巨人の接待」(大修館書店『現代文B』改訂版・『精選現代文B』新訂版)、「果汁」(数研出版『現代文B』改訂版)、「愛されすぎた白鳥」(筑摩書房『精選国語総合現代文編』改訂版)、「博士の愛した数式」(明治書院『新高等学校現代文B』)、「ハキリアリ」(明治書院『新精選現代文B』)である。

#### 文献

- 安藤宏(2008)「一人称の近代」『文学』9巻5号岩波書店 pp.32-45.
- 廣野由美子(2011)『一人称小説とは何か—異界の「私」の物語—』ミネルヴァ書房
- 木村功(2021)「教科書教材を読みなおす(X)小川洋子「バックストローク」論—依存する家族像—」岡山大学教育学部国語研究会『岡山大学国語研究』pp.1-15.
- 三谷邦明(1998)「物語の語りと近代小説—『藪の中』を読むあるいは一人称語りの饗宴—」『文学』9巻2号岩波書店 pp.39-46.
- 中島国彦(1978)「坊ちゃんの「性分」『坊ちゃん』の性格—一人称の機能をめぐって—」日本文学協会『日本文学』27巻11号 pp.9-16.
- 西田谷洋(2020)「読解の方法」『女性作家は捉え返す—女性たちの物語—』ひつじ書房 pp.1-20.
- 小川洋子(1999)『刺繍する少女』角川文庫
- 菅原克也(2017)『小説のしくみ』東京大学出版会
- 田中実(2008)「『読みの背理』を解く三つの鍵—テキスト、〈原文〉の影・〈自己倒壊〉そして〈語り手の自己表出〉—」『国文学解釈と鑑賞』73-7至文堂 pp.6-16.
- 田中実(2001)「キーワードのための試み」田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 理論編』教育出版 pp.57-66.
- 田中実(2021)「無意識に眠る罪悪感を減点にした三つの物語—〈第三項〉論で読む村上春樹の『猫を棄てる 父親について語る時』と『一人称単数』、あまきみこの童話『あるひあるとき』—」『都留文科大学大学院紀要』25 pp.11-34.